

江戸の3つの「六阿弥陀参」における 「武州六阿弥陀参」の特徴

古田悦造

- I. はじめに
- II. 官撰地誌書の記載内容における「六阿弥陀参」の比較
- III. 図会類の本文と挿絵における「六阿弥陀参」の比較
 - (1) 『江戸名所図会』における「六阿弥陀参」
 - (2) 『東都歳時記』における「六阿弥陀参」
- IV. 「江戸切絵図」の描画内容における「六阿弥陀参」の比較
- V. 紀行文・草子本における「武州六阿弥陀参」
- VI. おわりに

I. はじめに

天保9(1838)年に斎藤幸成によって著された『東都歳時記』¹⁾は、天保5(1834)年および同7(1836)年に刊行された『江戸名所図会』²⁾とともに近世末の地誌書として著名である。『江戸名所図会』は、江戸周辺地域の寺院や神社などの名所が、南方から東方へほぼ時計回りに地域別に記載されている³⁾。これに対して『東都歳時記』では、当時の江戸の祭りやご開帳などの年中行事が季節別に著されている。そして、春之部の2月の彼岸の項目に、「武州六阿弥陀参」⁴⁾、「山の手六阿弥陀参」、「西方六阿弥陀参」の3つの「六阿弥陀参」の寺院について、札番・地名・寺院名が記載されている。また、「西方三十三所

観音札所参」も提示され、同様の内容で記載がみられる。さらに末尾の附録には、「江戸三十三所観音参」など「三十三観音参」に関する社寺参詣が10例記載され、「江戸六地藏参」について2例と「四十八地藏尊参」が3例、他にも「江戸山の手二十八所地藏尊参」をはじめとして8例があげられている。このように『東都歳時記』の記載内容によって、江戸周辺地域における27例の社寺参詣の様相を知ることができる。

原淳一郎⁵⁾は、社寺参詣に関する研究成果を5つの視点に整理し、その1つとして都市文化史における社寺参詣史をあげている。そして、御府内およびその周辺地域を対象とした社寺参詣の研究が少ないことを指摘している。また鈴木章生⁶⁾は、1995年以降の10年間の江戸および周辺地域における社寺参詣に関する研究成果を展望している。その中で、5つのテーマに区分し、その1つとして都市市民の参詣行動に関する研究をあげている。そして、この分野での課題として、江戸の文化の理解が重要であることを指摘している。この江戸の文化の理解とは、当時の庶民の具体的な生活や行動に基づく研究の進展、を期待したものとして捉えることができる。

このような近年の研究動向を踏まえ、本研究では江戸周辺地域における社寺参詣の様相を対象とした。具体的な研究対象としては、寺院が比較的江戸周辺地域でまとまっている

キーワード：社寺参詣，六阿弥陀参，江戸，地誌書，図会

「武州六阿弥陀参」, 「山の手六阿弥陀参」, 「西方六阿弥陀参」の3つの「六阿弥陀参」をとりあげる。これら3つの「六阿弥陀参」の位置関係を図1に示した。「山の手六阿弥陀参」は、これらの内で最も札所が集中し、江戸城外堀の西縁部に位置している。「西方六阿弥陀参」の各寺院も江戸市中の西南地域に位置し、比較的まとまって配置されている。これらに対して「武州六阿弥陀参」は北東地域に位置し、北方は豊嶋村(現, 北区豊島1~8丁目)の西福寺から東方は亀戸村(現, 江東区亀戸1~9丁目)の常光寺に及ぶ広域な「六阿弥陀参」であった。

このような3つの「六阿弥陀参」に関して、文献資料における各「六阿弥陀参」に関

する記載内容を比較検討することにより、当時の人々にとってどの「六阿弥陀参」が受容されていたか、を明らかにすることを研究目的とした。使用した資料は、まず為政者としての江戸幕府が3つの「六阿弥陀参」をどのように認識・把握していたかについて、当時の官撰地誌書である『新編武蔵風土記稿』⁷⁾(文化7(1810)~文政11(1828)年)と『御府内備考』⁸⁾(文化7(1810)~文政12(1829)年)および『御府内寺社備考』⁹⁾(文化7(1810)~文政12(1829)年)の記述内容を比較・検討する。

一方、庶民の認識に関しては前述の『東都歳時記』や『江戸名所図会』の図会類と、当時の庶民に利用されていた地図資料として

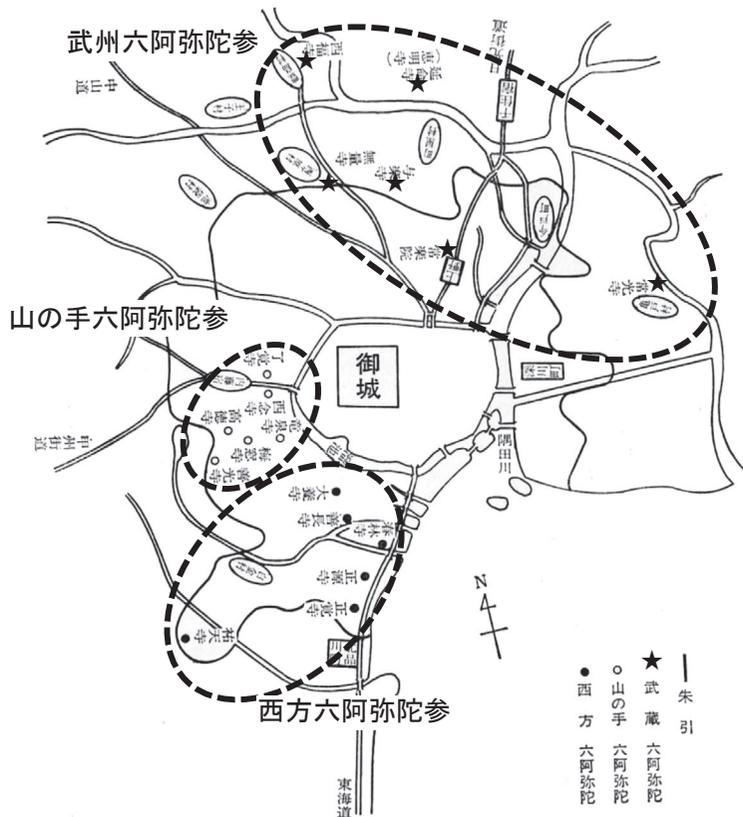


図1 江戸における3つの「六阿弥陀参」の位置関係

小森隆吉『江戸東京歴史読本』弘文堂, 1984, 112頁を一部改変。

『江戸切絵図』(尾張屋板)¹⁰⁾の描画内容と文字情報を相互に比較する。また、『嘉陵紀行』¹¹⁾(文政～天保年間(1818～1844))、『遊歴雜記』¹²⁾(文化～弘化年間(1804～1848))、『六阿弥陀紀行』¹³⁾(文化7年)のように、実際に参詣した紀行文とともに、当時庶民に読まれていた草子本も検討の対象とする。

II. 官撰地誌書の記載内容における「六阿弥陀参」の比較

表1に、近世末期の官撰地誌書である『新編武蔵風土記稿』と『御府内備考』および『御府内寺社備考』における、3つの「六阿弥陀参」に関する記述内容を提示した。

まず「武州六阿弥陀参」については、1番札所の西福寺から6番札所の常光寺まで、すべての札所の寺院に対して札所番号が記述され、無量寺と常光寺においては本尊の大きさが記されている。また、1～6番の寺院のみならず性翁寺や昌林寺についても「昔此辺六阿弥陀の像彫刻の時、根元の余木を以て彫刻せし像なれば、根元阿弥陀と称す」¹⁴⁾(性翁寺)や「六阿弥陀彫刻の時同木の末木を以てこの像を作りしゆへ、末木の観音と号と云」¹⁵⁾(昌林寺)との記述があり、「武州六阿弥陀参」との関連が示されている。さらに、1番札所の西福寺と2番札所の延命院の記述内容には、「武州六阿弥陀」についての縁起が、その内容は異なる点があるものの、極めて詳細に記述されている。そして、この内容が「武州六阿弥陀参」の由来に関連して、女性を供養したことが記述されている。

「山の手六阿弥陀参」と「西方六阿弥陀参」の寺院については、すべての寺院の阿弥陀像に関して坐像・立像の別や大きさが記載されている。しかし、札所番号に関しては記述が少ない。このことは、「山の手六阿弥陀参」・「西方六阿弥陀参」の寺院に関する記載の大部分が『御府内寺社備考』中にあたるため、この資料の性質に起因すると考えられる。し

かし、「山の手六阿弥陀参」に関しては、「山ノ手六阿弥陀第三番」(高德寺)や「山ノ手六阿弥陀第五番目」の2ヵ寺において札所番号の記述がみられる。また「西方六阿弥陀」についても、「西方六阿弥陀第三番」(春林寺)や「南方四番之札所」(正覚寺)¹⁶⁾の2ヵ寺にみられる。このような各寺院の記述内容から想定すれば、「山の手六阿弥陀参」および「西方六阿弥陀参」に関しては、「武州六阿弥陀参」と比較して、相対的に「六阿弥陀参」としての認識が稀薄であったといえる。

また、『新編武蔵風土記稿』において、西福寺の記述内容に「少の異同はあれと皆縁起などありて世人の口碑に伝るところなれば、其略を記しおきぬ」(表1参照)とあり、また延命院の「されど此六阿弥陀のことは、世の人信ずることにて」(表1参照)との記述によって、「武州六阿弥陀参」が当時の人々によって広く衆知されていたこと分かる。さらに、西福寺の官撰地誌書の記述内容に「近郊六ヶ所に安置して彼女の追福とせり、故に是を女人成仏の本尊と称す」(表1参照)との記述があり、「武州六阿弥陀参」の縁起が女性の死に基づくことが明示されている。このことは、女性たちの供養を目的としていることで、春秋の彼岸時に女性を中心とした多くの参詣者の存在を窺わせている。

このように官撰地誌書の記述内容からみると、江戸周辺地域の3つの「六阿弥陀参」において、特に「武州六阿弥陀参」が幕府とともに庶民からも一定の認知を得られていたことを示している。

III. 図会類の本文と挿絵における「六阿弥陀参」の比較

(1) 『江戸名所図会』における「六阿弥陀参」

『江戸名所図会』には、寺社地に関する情報が挿絵や本文に数多く表現されている。

表2は、3つの「六阿弥陀参」に関連する

表1 地誌書における3つの「六阿弥陀参」の寺院比較

名称	札所番号	所在地と寺院名	記述内容
武 州	1番	豊島村 西福寺	西福寺、本尊阿弥陀を置、是世に所謂六阿弥陀院の一なり、縁起を関するに、聖武帝御宇当国の住人豊嶋左衛門清光、紀伊国熊野権現を信じ、其靈夢に因て一社を王子村に建立し、王子権現と崇め祀れり、然るに清光子なきを憂ひ彼社に祈願せしに、一人の女子を産す、成長の後足立少輔某に嫁せしか、畜具の備はらざるを以少輔に辱しめられしかは、彼女私に逃れ出荒川に身を投て死す、父清光悲に堪ず是より仏教に心を委れしか、或夜靈夢に因て異木を得たり、折しも行基当国に來りし故、清光其事を告しに行基即ちかの異木を以て六体の阿弥陀を彫刻し、近郊六ヶ所に安置して彼女の追福とせり、故に是を女人成仏の本尊と稱す、当寺の本尊は其第一なり、次は足立郡小台村、第三は当郡西ヶ原村、第四は田畑村、第五は江戸下谷、第六は葛飾郡亀戸村なりと云、此説もとより妄誕にして信用すへきにあらざれど、当寺のみにあらず残る五ヶ所ともに、少の異同はあれど皆縁起などありて世人の口碑に伝る所なれば、其略を記しおきぬ、且清光は権頭と稱し、治承の頃の人なれば行基とは時代遙に後れたり、中興の僧有海延享三年六月八日寂す、境内に延慶三年の古碑あり【新編武蔵風土記稿】
	2番	小台村 延命院	阿弥陀堂、阿弥陀堂と稱する其第二番なり、沼田村の接地にあるを以て、人多く沼田の六阿弥陀といへり、其蓋觸を尋るに、人王四十五代聖武帝の御宇、豊嶋郡沼田村に庄司と云もの一人の女子あり、隣村に嫁す、いかなる故にや其家の婢女と沼田川に身を投じて死せり、父の庄司悲の余彼等追福の爲にて、所々の靈場を順拝し、紀州熊野山に詣りし時、山下にて一株の靈木を得たりしかば、則仏像を彫刻して、かの冥福を祈らんと、本国に歸りて後僧行基に託して、六体の弥陀を刻し、分て此辺六ヶ寺に安置せし其一なるよし縁起に載す、尤うけがたき説なり、聖武帝の頃庄司と云ものあるべき名にあらざり、且沼田村は豊嶋郡にはあらで本郡の地なり、かゝる杜撰の寺伝取べきにあらざり、また隣村宮城村性翁寺の伝には、足立の庄司宮城宰相の女子、豊嶋左衛門尉に嫁せしが、故ありて神龜二年六月朔日待女と共に荒川に投じて死す、其追福の爲にかの熊野山の靈木を以て、行基に託し彫刻して此辺の寺院六ヶ寺に安すと云、神龜は聖武帝の年号にて、少しくたがひあれど同じ伝へなり、是を以て姑年代の誤りせんにも、足立庄司と云ものは他の所見なし、(中略)されど此六阿弥陀のことは、世の人信することにて、其造立さまで近き頃のことゝも思はれず。【新編武蔵風土記稿】
	3番	西ヶ原村 無量寺	阿弥陀堂、行基の作坐像長三尺許六阿弥陀の第三番なり、六阿弥陀の由来は豊嶋村西福寺の條に詳なり。【新編武蔵風土記稿】
弥 陀	4番	田畑村 興來寺	阿弥陀堂、本尊は行基の作にて、六阿弥陀の第四番なり、六阿弥陀の由来は豊嶋村西福寺の條に詳なり【新編武蔵風土記稿】
	5番	下谷広小路 常樂院	常樂院門前、一、町内小名、南寺門前表通里俗上野広小路と相唱申候。同門前横町を六阿弥陀横町と唱候義は、当寺本尊六阿弥陀の内五番目の仏像安置仕置候故里俗に前出の通相唱申候【御府内寺社備考】
	6番	亀戸村 常光寺	本尊弥陀行基の作にして長六寸許、脇立に觀音勢至を安す、これ六阿弥陀第六番目にして、春秋彼岸は殊に參詣のもの多し、縁起あれと世の知る所にして、外に事実かはらざれば略す【新編武蔵風土記稿】
	木余	宮城村 性翁寺	本尊弥陀行基の作なり、昔此辺六阿弥陀の像彫刻の時、根元の余木を以て彫刻せし像なれば、根元阿弥陀と稱すと云、六阿弥陀の由来は小台村の條に出したければ合わせ見るべし【新編武蔵風土記稿】
山 手 六 阿 弥 陀	木残	西ヶ原村 昌林寺	本尊正觀音は行基の作にて、六阿弥陀彫刻の時同木の末木を以てこの像を作りしゆへ、末木の觀音と号と云【新編武蔵風土記稿】
	1番	四谷御門外 了学寺	本尊出世阿弥陀如来、木立像丈三尺恵心作【御府内寺社備考】
	2番	同(四谷)大通横町 西念寺	本尊阿弥陀如来、木立像、聖德太子作、丈三尺一寸五分【御府内寺社備考】
阿 弥 陀	3番	青山熊野横町 高德寺	本尊阿弥陀、木立像、長三尺壹寸、恵心僧都作、山ノ手六阿弥陀第三番【御府内寺社備考】
	4番	同(青山)百人町 善光寺	本尊阿弥陀如来、木像一尺五寸【御府内寺社備考】
	5番	同(青山)通り久保町 梅窓寺	本尊阿弥陀如来、木立像、長二尺五寸、聖德太子作、山ノ手六阿弥陀第五番目【御府内寺社備考】
西 方 六 阿 弥 陀	6番	赤坂一ツ木 龍泉町	本尊阿弥陀如来、木立像、行基作、丈二尺九寸【御府内寺社備考】
	1番	西久保 大養寺	本尊阿弥陀如来、木立像、長三尺五寸、安阿弥作【御府内寺社備考】
	2番	飯倉(かはらけ町) 善長寺	本尊阿弥陀如来、木立像、丈四尺【御府内寺社備考】
	3番	三田四丁目 春林寺	本尊阿弥陀如来、木座像、丈二尺八寸、恵心作、西方六阿弥陀第三番【御府内寺社備考】
	4番	高輪庚申堂横町 正覚寺	阿弥陀如来、木立像、長二尺五寸、運慶作、南方四番之札所【御府内寺社備考】
	5番	白金 正源寺	本尊阿弥陀如来、木立像、丈一尺四寸五分、恵心作【御府内寺社備考】
6番	目黒 祐天寺	阿弥陀堂、本尊は坐像にて長二尺五寸。阿弥陀堂、本尊木仏坐像にて長三尺五寸【新編武蔵風土記稿】	

『新編武蔵風土記稿』、『御府内備考』および『御府内寺社備考』により作成。

注)【】内は資料の出典を示す。

表2 『江戸名所図会』にみられる3つの「六阿弥陀参」の寺院比較

名称	札所番号	所在地と寺院名	記述内容	挿絵
武 州 六 阿 弥 陀	1番	豊島村 西福寺	豊島にあり。禅宗にして行基菩薩の開基なり。本尊阿弥陀如来も同作なり。(中略)当寺は六阿弥陀第壹番目にして、これを元木の如来と云ふ。縁起あれども未だ詳ならず(後略)。	あり
	2番	小台村 延命院	応味院と号す。下沼田にあり。真言宗の古刹にして行基大士の草創なり。本尊阿弥陀如来は同じ作にして、六阿弥陀第二番目とす。春秋二度の彼岸には、参詣多し。	なし
	3番	西ヶ原村 無量寺	西光院と号す。同所北の方西原にあり。真言宗にして、弘法大師の作の不動尊を本尊とす。開行は行基菩薩なり。本堂にかくる南無阿弥陀仏の額は幡隋院了頌和尚の筆なり。阿弥陀堂 本堂の右にあり。本尊は行基菩薩の作、六阿弥陀第三番目なり。	あり
	4番	田畑村 興楽寺	田畑村にあり。真言宗にして、本尊阿弥陀如来仏工春日の作。開山は行基大士なり。阿弥陀堂 本堂の左の方にあり。本尊は行基菩薩の作、六阿弥陀第四番目なり。	あり
	5番	下谷広小路 常楽院	長福寿寺と号す。天台宗五条天神の南、忍川の向うにあり。本尊阿弥陀如来は行基大士の作にして、六阿弥陀五番目なり。二月八月の彼岸中甚だ賑はへり。	あり
	6番	亀戸村 常光寺	同所一丁あまり巽の方にあり。曹洞宗の禅刹にして、橋場の総泉寺に属す。開山は行基大士、中興は勝庵最大和尚と号す。本尊阿弥陀如来は仏殿の像は行基大士の作なり。江戸六阿弥陀第六番目なり(後略)。	あり
木 余 木 残		宮城村 性翁寺	宮城村竜燈山性翁寺に安ず。往古行基大士六体の阿弥陀如来の像を彫刻ありし、その余材を以ってこれを造りたまひ、草堂の中に安置ありしを、遙に後、明応の頃、正善庵春和尚改めて一字の梵刹となして、この地に住し給へり。即ちこの寺の開祖たり(後略)。	なし
		西ヶ原村 昌林寺	同所西の方にあり。曹洞の禅宗にして、本尊末木観世音菩薩は、開山行基菩薩の作なり。往古六阿弥陀彫刻の折から末木を以って作りたまひしとぞ。むかしは補陀落寿院と号く。その後久しく荒廃におよぶ。然るに応永年中祥林といへる僧中興せしより、昌林寺と号す(後略)。	なし
山 手 六 阿 弥 陀	1番	四谷御門外 了学寺	なし	なし
	2番	同(四谷)大通横町 西念寺	なし	なし
	3番	青山熊野横町 高德寺	なし	なし
	4番	同(青山)百人町 善光寺	本尊阿弥陀如来は御長一尺五寸、	あり
	5番	同(青山)通り久保町 梅窓寺	本尊阿弥陀如来の像は聖徳太子の作なり。	あり
	6番	赤坂一ツ木 龍泉町	本尊は立像御丈三尺余の弥陀如来、行基の作なり。	あり
西 方 六 阿 弥 陀	1番	西久保 大養寺	なし	なし
	2番	飯倉(かはらけ町) 善長寺	なし	なし
	3番	三田四丁目 春林寺	なし	なし
	4番	高輪庚申堂横町 正覚寺	なし	なし
	5番	白金 正源寺	なし	なし
	6番	目黒 祐天寺	本堂本尊阿弥陀如来(御長一尺五寸ばかり。恵心僧都の作にして、開山生涯持念の尊像なり。)	あり

『江戸名所図会』により作成。

寺院について、本文の記述内容と挿絵の有無について示したものである。

「武州六阿弥陀参」では、官撰地誌書と同様に、1～6番の寺院のすべてに札所番号が明記されている。また性翁寺や昌林寺に関しても、「往古行基大士六体の阿弥陀如来の像を彫刻ありし、その余材を以つてこれを造りたまひ」¹⁷⁾(性翁寺)や「往古六阿弥陀彫刻の折から末木を以つて作りたまひしとぞ」¹⁸⁾(昌林寺)と、官撰地誌書とは表現は異なるものの、同様の意味内容が記述されている。

次に、「山の手六阿弥陀参」と「西方六阿弥陀参」について、本文中の記述内容を検討する。「山の手六阿弥陀参」に関しては、4番札所の善光寺、5番札所の梅窓寺、6番札所の龍泉寺の3カ寺において記述がある。しかし、すべての文章には「山の手六阿弥陀参」を構成する寺院であることを示す内容はみられない。さらに、他の3カ寺においてはまったく記述がない。「西方六阿弥陀参」の各寺院に関しても、6番札所の祐天寺に本尊の阿弥陀如来についての短い文章はみられるが、ここでも「西方六阿弥陀参」と関連を示す記述はない。さらに、他の5カ寺はまったく記述がない。

次に、『江戸名所図会』の挿絵について比較検討する(表2参照)。「武州六阿弥陀参」については、2番札所の延命院と性翁寺および昌林寺の3カ寺の挿絵はない。しかし、他の5カ寺については挿絵とともに、図中に寺院名や札所番号が記載され、6番札所の挿絵には「春秋二度の彼岸中都鄙の老若参詣群集せり」¹⁹⁾とあり、また5番札所の常楽院の挿絵でも「春秋二度の彼岸中賑ハシ」²⁰⁾とみえ、当時の参詣の様相の一端が明らかになる記述もみられる。

これに対し、「山の手六阿弥陀参」や「西方六阿弥陀参」の寺院の挿絵は、「武州六阿弥陀参」に比べ極めて少ない。「山の手六阿弥陀参」では4番札所の善光寺、5番札所の

梅窓寺、6番札所の龍泉寺の3カ寺が描かれているに過ぎず、「西方六阿弥陀参」においても6番札所の目黒の祐天寺のみであった。いずれの場合も、おのおの「六阿弥陀参」との関連を示す記述はみられない。

以上のように、『江戸名所図会』における「六阿弥陀参」に関する内容は、官撰地誌書と同様に、「武州六阿弥陀参」と比較して「山の手六阿弥陀参」や「西方六阿弥陀参」の知名度やこれらへの関心度が低かったことを示している。

(2)『東都歳時記』における「六阿弥陀参」

『東都歳時記』においては、彼岸の項に「六阿弥陀参、六体ともに行基菩薩の作なり、彼岸中都鄙の詣人道路に満つ、五番下谷広小路(天台)常楽院(田畑へ廿五丁)、四番田畑(真言)興楽寺(西が原へ廿丁)、三番西か原(真言)無量寺(豊島へ廿五丁)、一番上豊島村(禅宗)元木西福寺(沼田へ十五丁、此間舟渡し)、二番下沼田(真言)延命院(亀戸へ二里半)、六番亀戸(禅宗)常光寺、宮城村性翁寺阿弥陀如来の像は、行基菩薩六阿弥陀の木末を以て造り給ふ所なり、世俗木あまりの弥陀といふ、沼田延命院より三丁千住町へ通る土手下にあり、六阿弥陀巡礼の輩はかならず当寺へ詣づるなり」²¹⁾と、「武州六阿弥陀参」についての詳細な記述がある。ここで示されている順番は、札所の寺院を時計回りに廻る順路となっている。また、それらの寺院の位置関係を示す図も掲載されている(図2)。

これに対して、「山の手六阿弥陀参」に関しては、1番札所を例にその記述内容を示すと「一番四谷御門外了学寺(恵心僧都作)」²²⁾である。この内容は、各寺院の場所と寺院名および阿弥陀仏の造形者に関しては把握できるが、各寺院の相互の距離や位置関係は不明瞭である。「西方六阿弥陀参」も、すべて同様な記述で表現されている。このように、「山の手六阿弥陀参」や「西方六阿弥陀参」

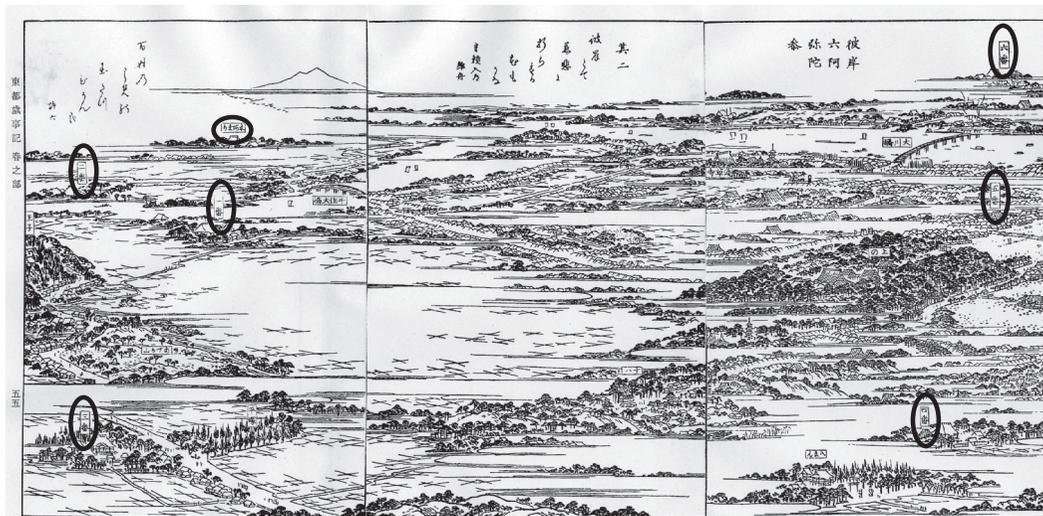


図2 『東都歳時記』にみられる「武州六阿弥陀参」の寺院の位置図

名著普及会編『日本名所図会6』名著普及会、1975、53-55頁を一部改変。

注) 図中の○印が対象の寺院。数字は札所番号を示す。

の記述は、やはり「武州六阿弥陀参」と比較し関心度や知名度が低かったことを示唆している。

IV. 「江戸切絵図」の描画内容における「六阿弥陀参」の比較

表3に、「江戸切絵図」における3つの「六阿弥陀参」の描画内容を、尾張屋板に基づいてまとめた。

「武州六阿弥陀参」のすべての寺院は、絵図にその寺院名が表記され、札所番号についても、5番札所の常楽寺を除いた5カ寺で明記されている。「山の手六阿弥陀参」については、寺院名が「武州六阿弥陀参」と同様にすべて図中にみられるものの、札所番号に関しては全く表記されていない。さらに「西方六阿弥陀参」に関しては、1番札所の大養寺と6番札所の祐天寺の寺院名表記がない²³⁾。札所番号に関しても、「山の手六阿弥陀参」の寺院と同様にまったくみられない。このような「武州六阿弥陀」と「山の手六阿弥陀参」および「西方六阿弥陀参」との記述の相

表3 『江戸切絵図』(尾張屋板)における3つの「六阿弥陀参」の寺院比較

名称	札所番号	所在地と寺院名	寺院名	札所番号
武州六阿弥陀	1番	豊島村 西福寺	○	○
	2番	小台村 延命院	○	○
	3番	西ヶ原村 無量寺	○	○
	4番	田畑(端)村 與(与)楽寺	○	○
	5番	下谷広小路 常楽院	○	×
	6番	亀戸村 常光寺	○	○
山の手六阿弥陀	木余	宮城村 性翁寺	○	○
	木残	西ヶ原村 昌林寺	○	○
	1番	四谷御門外 了学寺	○	×
	2番	同(四谷)大通横町 西念寺	○	×
	3番	青山熊野横町 高德寺	○	×
	4番	同(青山)百人町 善光寺	○	×
西方六阿弥陀	5番	同(青山)通り久保町 梅窓寺	○	×
	6番	赤坂一ツ木 龍泉町	○	×
	1番	西久保 大養寺	×	×
	2番	飯倉(かはらけ町) 善長寺	○	×
	3番	三田四丁目 春林寺	○	×
	4番	高輪庚申堂横町 正覚寺	○	×
西方六阿弥陀	5番	白金 正源寺	○	×
	6番	目黒 祐天寺	×	×

『江戸切絵図』(尾張屋板)により作成。

注) ○印は明記されていることを、×印はないことを示す。

異は、官撰地誌書や図会類における状況とほぼ類似している。

しかし、絵図には、官撰地誌書や図会類にはみられなかった詳細な情報が明示されている。図3は、嘉永7(1854)年に刊行された「染井王子巢鴨辺絵図」²⁴⁾を示したものである。図中には3番札所の無量寺と木末の昌林寺が、札所番号や阿弥陀仏の由来とともに、文字表記で示されている。また、現在の都電荒川線の庚申塚駅の地点には、「六阿弥陀千住道」のように「六阿弥陀参」に関連する文字記載も表されている。さらに、「王寺権現へマイルニハ岩屋弁天地内ノ外近辺橋ナシ」や「コノスヘ一丁行バ名主ノタキアリ」(図3参照)という記述もみられ、「六阿弥陀参」の順路に位置する寺社や名所が明記され、道案内としての機能も有していた。

図4には、安政3(1856)年の「根岸谷中日

暮里豊島辺図」²⁵⁾を示した。この図にも、1番札所の西福寺や2番札所の延命寺(院)および4番札所の興楽寺とともに、木余如来の名称とともに性翁寺に縁起に関わる足立姫の墓があることが示されている。また、「此道六アミダ三バン西ケ原工出ル」(図4参照)との文字情報もあり、「染井王子巢鴨辺絵図」と同様に道案内図の役割を果たしていた。さらに、安政3年の「隅田川向嶋絵図」²⁶⁾の切絵図にも、6番札所の常光寺の近い地点に「六アミダ道」と明記されている。

このような道案内の役割を果たす記載内容は、「山の手六阿弥陀参」や「西方六阿弥陀参」に関連したものではなく、「武州六阿弥陀参」のみに限られた特徴である。この点においても、「武州六阿弥陀参」が他の2つと比較して、庶民により一層浸透していた「六阿弥陀参」であったことが指摘できる。

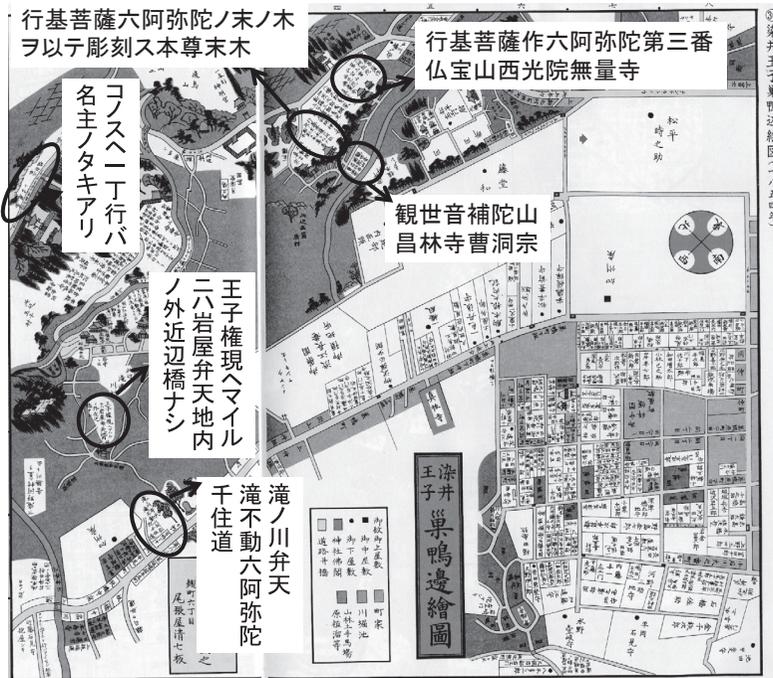


図3 『江戸切絵図』(尾張屋板)にみられる寺社参詣情報

師橋辰夫監修『嘉永・慶応 江戸切絵図』人文社、1995、74-75頁を一部改変。

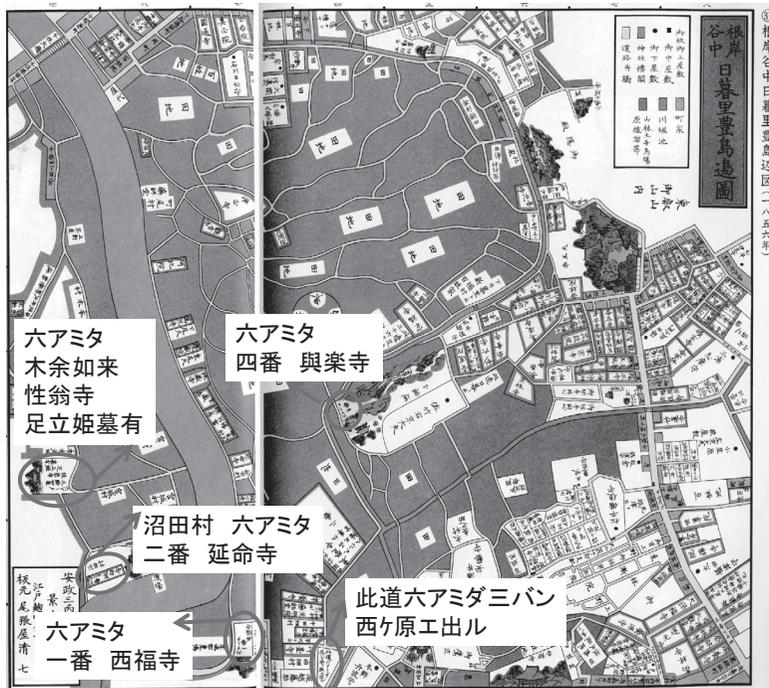


図4 『江戸切絵図』(尾張屋板)にみられる寺社参詣情報
 師橋辰夫監修『嘉永・慶応 江戸切絵図』人文社, 1995, 76-77頁を一部改変。

V. 紀行文・草子本における「武州六阿弥陀参」

官撰地誌書は、現地踏査した内容に基づいているものの、一般庶民が目にするのがない書籍である。名所図会類についても、「六阿弥陀参」のみを対象とした書籍でない。そこで、実際に庶民が「六阿弥陀参」を行った際の紀行文の記述内容を検討することによって、「六阿弥陀参」の実態の側面を把握する。

「六阿弥陀参」についての記述がある紀行文は、年次の古い順に示すと、文化12(1815)年の大浄(十方庵)敬順のもの²⁷⁾、筆者が不明であるが文政7(1824)年の『六阿弥陀修行』²⁸⁾、文政13(1830)年の村尾正靖(嘉陵)の『嘉陵紀行』²⁹⁾の3点が見出せた。これらは、いずれも「武州六阿弥陀参」に関するも

ので、他の「山の手六阿弥陀参」や「西方六阿弥陀参」についての紀行文は、管見の限り見出せなかった。

村尾は江戸市中および周辺地域を頻繁に散策している。また、「坂を上る」や「西に行けば」などの地理的情報に関する記述も明瞭で、他の2点と比べ信憑性が高いと判断できる。さらに、文章で表現された行程の他に、コンパス(磁針)を用いた³⁰⁾方位が比較的正確な順路も図³¹⁾で描かれ、各札所の位置関係を示している。この図には、6カ寺の「武州六阿弥陀参」の寺院以外に、木余の阿弥陀如来像が安置されている性翁寺や順路に位置していた他の寺社も示されている。このため、最初に『嘉陵紀行』の内容を検討する。

村尾の「武州六阿弥陀参」の参詣順路は、次の通りである。

(自宅) → 【6番 常光寺】 → 【木余 性

翁寺】→【2番 延命寺】→【1番 西福寺】→【3番 無量寺】→【4番 興楽寺】→【5番 長福寺】→（自宅）

図5に、その順路を現在の地形図上で示した。これをみると、村尾は札所をその番号順ではなく、最初に自宅から最も遠い6番札所を訪れ、その後は反時計回りに廻って自宅に戻っている。

大浄敬順の参詣順路は次の通りである。

（自宅）→【5番 長福寺（常楽寺）】→【6番 常光寺】→【2番 延命寺】→【1番 西福寺】→【3番 無量寺】→【4番 興楽寺】→（自宅）

これも村尾と同様に、反時計回りの順路である。

さらに、筆者不詳の『六阿弥陀紀行』の参詣順路は、次の通りであった。

（自宅）→【1番 西福寺】→【2番 延

命寺】→【3番 無量寺】→【4番 興楽寺】→【5番 常楽寺】→【6番 常光寺】→（自宅）

この順路は、札所番号に忠実な行程となっている。また、この紀行文は他の紀行文に比して多くの寺社仏閣名が記述され、ガイドブック的な内容ともいえる。さて、この紀行文の記述通りに寺院を廻るとすれば、1番札所と2番札所との間で隅田川を1度渡り、さらに2番札所から3番札所へ戻る。この順路は、札所番号順に忠実である反面、時間的および距離的には無駄な行程である。

次に「六阿弥陀参」を題材とした草子本の例をあげる。

文化8(1811)年の十辺舎一九『滑稽六阿弥陀詣』³²⁾では、「武州六阿弥陀参」が題材となっている。『滑稽六阿弥陀詣』中の挿絵(図6)には16名の人物が描かれ、「世をすて

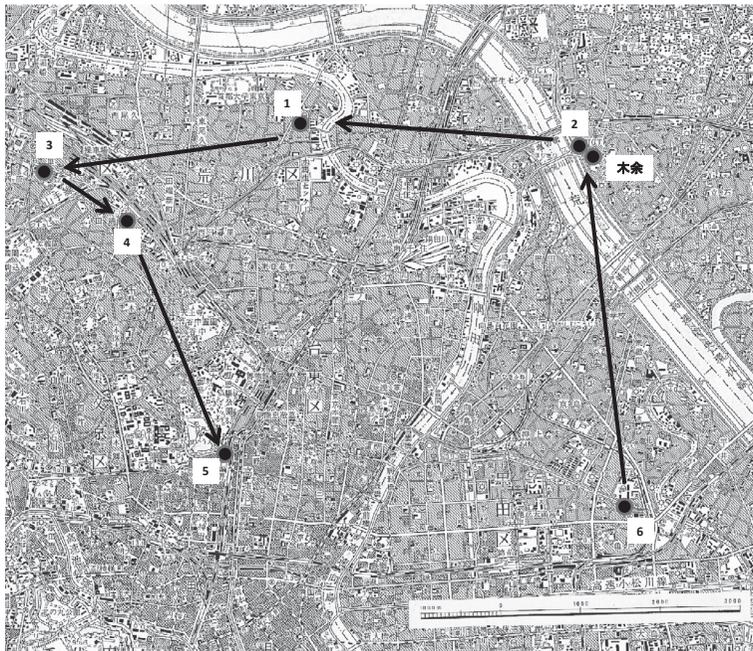


図5 村野正靖(嘉陵)の「武州六阿弥陀」における参詣順路

朝倉治彦訳注『江戸近郊道しるべ』平凡社、1985、387-394頁により作図。
2万5千分1地形図「草加」、「東京首部」、「赤羽」、「東京西部」を基図として使用。
注) 数字は寺院の札所番号を示す。

- いる。本稿では、①鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会 上巻』角川書店、1975、814頁、②鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会 中巻』角川書店、1975、894頁、③鈴木棠三・朝倉治彦校注『江戸名所図会 下巻』角川書店、1975、916頁のものを用いた。
- 3) 金子は、『江戸名所図会』の挿絵を資料として江戸の行楽地を分析するとともに、その内容が南から時計回りに記述されていることを指摘している。金子晃之「近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』からみた行動文化—」歴史地理学 175、1995、20-43頁。
 - 4) 『東都歳時記』（前掲1）52頁）では「六阿弥陀参」とのみ記載されているが、延享3（1746）年の安勝子著『江戸内めぐり』（国会図書館請求記号291.36-H618e）に「武州六阿弥陀」と記され、他の2つの「六阿弥陀参」との区別を明確にするため、本稿では「武州六阿弥陀参」の名称を用いた。
 - 5) 原淳一郎『近世寺社参詣の研究』思文閣出版、2007、3-51頁。
 - 6) 鈴木章生「社寺参詣をめぐる研究の動向と展望—江戸およびその周辺を中心として—」交通史研究56、2005、81-94頁。
 - 7) 蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿 第1巻～第12巻』雄山閣、1957-1963。
 - 8) 三島政行ほか原編、蘆田伊人編集校訂『御府内備考 第1巻～第6巻』雄山閣、2000。
 - 9) 朝倉治彦解説『御府内寺社備考 第1巻～第7巻 別冊1』名著出版、1986-1987。
 - 10) ①斎藤直成編『江戸切絵図集成 第5巻 尾張屋板上』中央公論社、1982、125頁、②斎藤直成編『江戸切絵図集成 第5巻 尾張屋板下』中央公論社、1982、124頁に復刻・刊行されている。本稿では、入手が容易である③師橋辰夫監修『嘉永・慶応 江戸切絵図（尾張屋清七板）』人文社、1995、80頁を用いた。
 - 11) ①朝倉治彦編注『江戸近郊道しるべ』平凡社、1985、418頁。②『江戸叢書』巻1には、「嘉陵紀行」の書名で1-378頁に所収されているが、「武州六阿弥陀参」に関する紀行文は文章・図版ともに掲載されていない。最近、現代語訳版が出版されたが、本著でも「武州六阿弥陀参」に関する紀行文は掲載されていない。③村尾嘉陵、阿部孝嗣訳『江戸近郊道しるべ 現代語訳』講談社学術文庫、2013、325頁。なお、村尾正靖（嘉陵）は御三卿の清水家に仕えていた。
 - 12) 「十方庵遊歴雑記」の書名で『江戸叢書』①巻3に第1編の3冊分が1-440頁、②巻4に第2編の3冊分が1-440頁、③巻5に第3編の3冊分が1-400頁、④巻6に第4編の3冊分が1-436頁、⑤巻7に第5編の3冊分が1-430頁に所収されている。なお大浄（十方庵）敬順は、江戸小日向水道端の本法寺中廓然寺の4代目の住職であった。
 - 13) 北区史編纂調査会編『北区史 資料編 近世1』東京都北区、1992、357-360頁。筆者不詳。
 - 14) 前掲7）第7巻146頁。
 - 15) 前掲7）第1巻352頁。
 - 16) この「南方」の記述は、「西方六阿弥陀参」の「西方」とは関連せず、各寺院の中でも方角的に最も南に位置していることを意味していると想定される。
 - 17) 前掲2）③364頁。
 - 18) 前掲2）③144頁。
 - 19) 前掲2）③554-555頁。
 - 20) 前掲2）③325頁。
 - 21) 前掲1）52頁および56頁。
 - 22) 前掲1）56頁。
 - 23) 6番札所の祐天寺は、尾張屋板の図版外に位置している。
 - 24) 前掲10）③74-75頁。
 - 25) 前掲10）③76-77頁。
 - 26) 前掲10）③78-79頁。
 - 27) 前掲12）②162-167頁に「三郡六阿弥陀の順路詠歌」の標題で、また前掲13）340-343頁にも同様の標題で掲載されている。
 - 28) 前掲13）標題は「六阿弥陀紀行」。
 - 29) 前掲11）387-394頁に「六阿弥陀道のり」の標題で掲載されている。また、前掲13）361頁には「六阿弥陀路程略図」の標題で掲載されている。しかし、文章はあるものの図版がない。なお、村尾嘉陵の『江戸近郊道

しるべ』に関して、鈴木は直線的行動と周回的行動とに大別し、おのおの直行往復型・沿道立寄り型・現地展開型の3類型と巡拝型・周遊型の2類型の合計5つのパターンを提示している。また高橋も村尾の紀行文のうち、多摩地域の府中と埼玉県の大宮への紀行文を紹介・解説している。①鈴木章生「村尾嘉陵の『江戸近郊道しるべ』にみる行動と心性」目白大学文学・言語学研究2, 2006, 1-14頁。②高橋千剣破『『江戸』を歩いた人々(25) 村尾嘉陵と江戸近郊日帰りの旅』あさひ銀総研レポート, 9-10, 2000, 38-41頁。

30) 文政11(1828)年の紀行文「千束の道しるべ」

には、「かへさの道、樹木谷より針をふりて方位をみたるに」との記述があり、コンパス(磁針)を用いていたことが分かる。前掲11) ①350頁。

31) 前掲11) ①393頁。

32) ①『十返舎一九全集 第4巻』日本図書センター, 2001, 485-596頁。坂本要は江戸の六阿弥陀に関する記述において、十返舎一九の『滑稽六阿弥陀詣』の出版によって、一層「六阿弥陀参」が流行したとしている。しかし、「武州六阿弥陀参」と女性参詣者との関連については言及していない。②坂本要「六阿弥陀」(小木新造他編『江戸東京学事典』三省堂, 1987), 144-145頁。